



21世紀には北海道そして北見の時代が来る？

産総研の青木さんよりご指名を受けました北見工大の兼清と申します。青木さんとは産総研で“同じ釜の飯を食った”間柄ですが、私が3年前に北見工大に異動してからも、共同研究などで大変お世話になっています。大学卒業以降、国内外を毎年のように転々とする流浪の身であった私は、様々な土地での暮らしを経験してきましたが、北見のような“極寒”の地に住むのは初めてのことです。この地方の気候の特徴としては、北海道の中でもとりわけ冬の寒さが厳しい反面、夏は涼しいことや、一年を通して降水量が少なく、低湿度で晴天率が高いことなどが挙げられます。参考までに北見に関する気象データ（1979～2000年の平均値）を示しますと、1月の最低気温：-14.5℃、8月の最高気温：25.0℃、年間降水量：748.5mmとなっています。読者の中には、2005年に北見工大で開催された分析化学討論会に参加された方も多いと思いますが、厳冬期の北見を体験された方は少ないでしょう。そこで今回は、私の3年間の経験を通して北見の冬について紹介し、最後に地球温暖化との関連で我田引水的？な拙論を披露したいと思います。

2006年10月北見に着任すると、さっそく二つの試練が待ち構えていました。一つは新規の研究室をゼロから立ち上げることで、もう一つは厳しい冬を生き延びることです。前者については現在でも苦労が絶えませんが、後者に関しては、悲壮な覚悟で乗り込んだものの、案外スムーズに乗り切ることができました。大学の建物は、セントラルヒーティングにより全体が暖かく保たれています。すべての建物は渡り廊下で結ばれているので、学内移動の際に屋外へ出る必要はありません。自宅についても寒さへの備えは万全で、暖房にはガスストーブとエアコンが備え付けられており、窓は二重窓で断熱性の良い“エコ住宅”です。明け方、戸外が氷点下20℃近くまで下がった日でも、室内は暖かく保たれていますので、寒くて布団から出るのが辛いという思いをすることはありません。それが理由かどうかは不明ですが、産総研時代よりも出勤時間が大幅に早まったのは事実です。

ところで、自宅の近くにはアイスクリーム屋さんがあります。私はてっきり、アイスクリームを販売するのは夏場だけで、冬場は休業するか別の商品を販売するのだろうと思っていました。ところが予想に反して、その店は通年でアイスクリームを販売しているのです。地元の人に聞いてみると、冬の室内はストーブが効き過ぎて暑いので、薄着になってアイスクリームを食べて暑さをしのいでいるというのが実態のようです。夏は涼しいので、あまりアイスクリームは食べない・・・つまり、北海道では外気温は夏>冬ですが、室温は夏<冬という図式が成立しているようです。冬場は牛乳の乳脂肪分濃度が高くなるため、夏場よりも美味しいアイスクリームが賞味できるのかもしれませんが。

以上のように、冬の室内は快適と言うよりも暑すぎるくらいの環境にあるわけですが、屋外に出た場合はどうでしょうか？ これも建物の場合と同様、人間に万全の防寒対策を施せば問題ありません。部屋の中で十分に体を温めた後、頭のとっぺんから足先まで完全装備を整えておけば、一時間くらい戸外に居ても平気です。ただし、凍った路面で滑らないよう注意が必要です。北見の冬は、気持ちよく晴れた“オホーツクブルー”の空が広



結氷した屈斜路湖に憩う白鳥

がり、風も穏やかな日が多いので、美しく雪化粧した市街地や郊外の風景を眺めながらの雪上散歩を楽しむことができます。夜の楽しみは、帰宅途中に街頭で表示されている気温計の数値を確認することです。真冬では、気温がマイナス一桁台だと暖かいと感じてしまいます。そして気温が-10℃を下回ると、鼻毛が凍ってきます。さらに-20℃に近づくと、鼻毛の硬度が高まるのがわかります。今では、“鼻毛センサー”を利用して、かなり正確に気温を推定できるようになりました。

さて、最近何かと話題の地球温暖化ですが、この地方の気候にも温暖化の影響が現れてきているようです。以前は最低気温が-30℃にまで達することもあったようですが、最近では精々-20℃くらいまでしか下がりませんし、流水の接岸日数も徐々に減少しています。目下、世界各国で温暖化対策が進められていますが、当面は温暖化の傾向は止まらないでしょう。これは、グローバルな視点からは憂うべきことかもしれませんが、ローカルな視点から見ると、北海道そして北見にとっての好機であると捉えることもできます。なぜなら、この地域が人間の居住や農作物の生育にとってより好都合な条件を備えるようになるからです。冬は気温が上昇して今以上に快適に過ごせるようになりますし、夏は気温が少々上昇しても高温多湿の本州各地とは比較にならない快適さでしょう。農産物の生産最適地は北上し、収穫量の増加も予測されています。もちろん、生態系の変化などにより生じる負の側面もあるでしょうが、相対的に見れば、この地方は温暖化の恩恵をより多く受けることになるのではないのでしょうか。というわけで、近い将来、地球温暖化への適応策の切り札として、北海道そして北見が新たな脚光を浴びる時がやって来るものと私は確信しています。

さて次回ですが、学生時代の研究室の後輩で、現在甲南大学の講師として活躍されている岩月聡史先生にお願いました。岩月先生と私は研究室の在籍期間が重なっていませんので、彼のパーソナリティについては未知な部分が多いのですが、それだけにどんなサプライズが飛び出すのか、今から楽しみです。

〔北見工業大学 兼清泰正〕